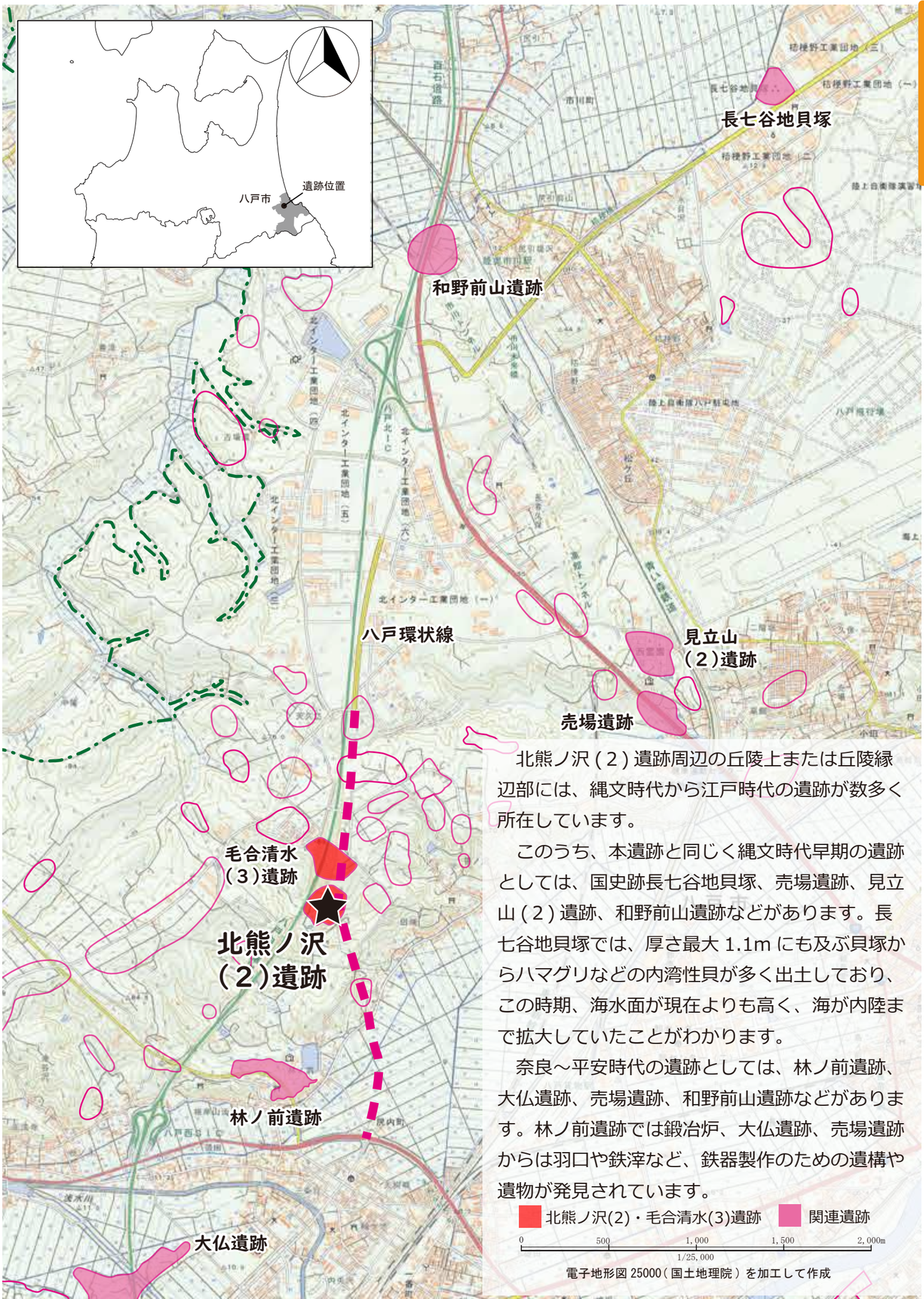
北熊ノ沢（2）遺跡　現地見学会資料

―縄文時代の狩猟場と平安時代の鍛冶遺構―

令和４年 10 月 13 日（木）・14 日（金）
青森県埋蔵文化財調査センター



北熊ノ沢（２）遺跡周辺の丘陵上または丘陵縁辺部には、縄文時代から江戸時代の遺跡が数多く所在しています。

このうち、本遺跡と同じく縄文時代早期の遺跡としては、国史跡長七谷地貝塚、売場遺跡、見立山（２）遺跡、和野前山遺跡などがあります。長七谷地貝塚では、厚さ最大 1.1m にも及ぶ貝塚からハマグリなどの内湾性貝が多く出土しており、この時期、海水面が現在よりも高く、海が内陸まで拡大していたことがわかります。

奈良～平安時代の遺跡としては、林ノ前遺跡、大仏遺跡、売場遺跡、和野前山遺跡などがあります。林ノ前遺跡では鍛冶炉、大仏遺跡、売場遺跡からは羽口や鉄滓など、鉄器製作のための遺構や遺物が発見されています。

北熊ノ沢 (2) 遺跡の概要

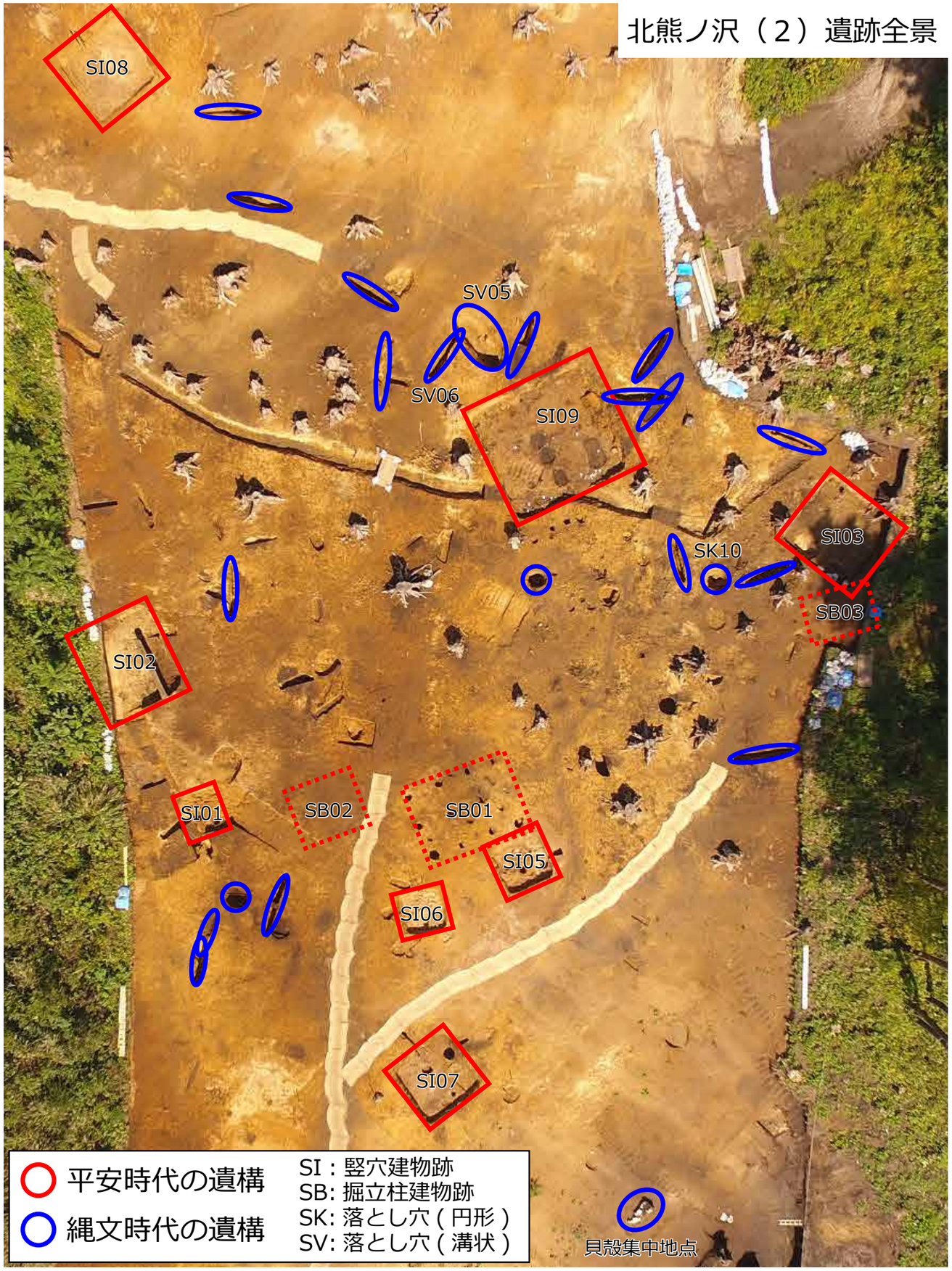
北熊ノ沢 (2) 遺跡は、八戸環状線道路建設事業（天久岱工区）に伴い、隣接する毛合清水 (3) 遺跡と共に、令和４年度に青森県埋蔵文化財調査センターが調査を行いました。

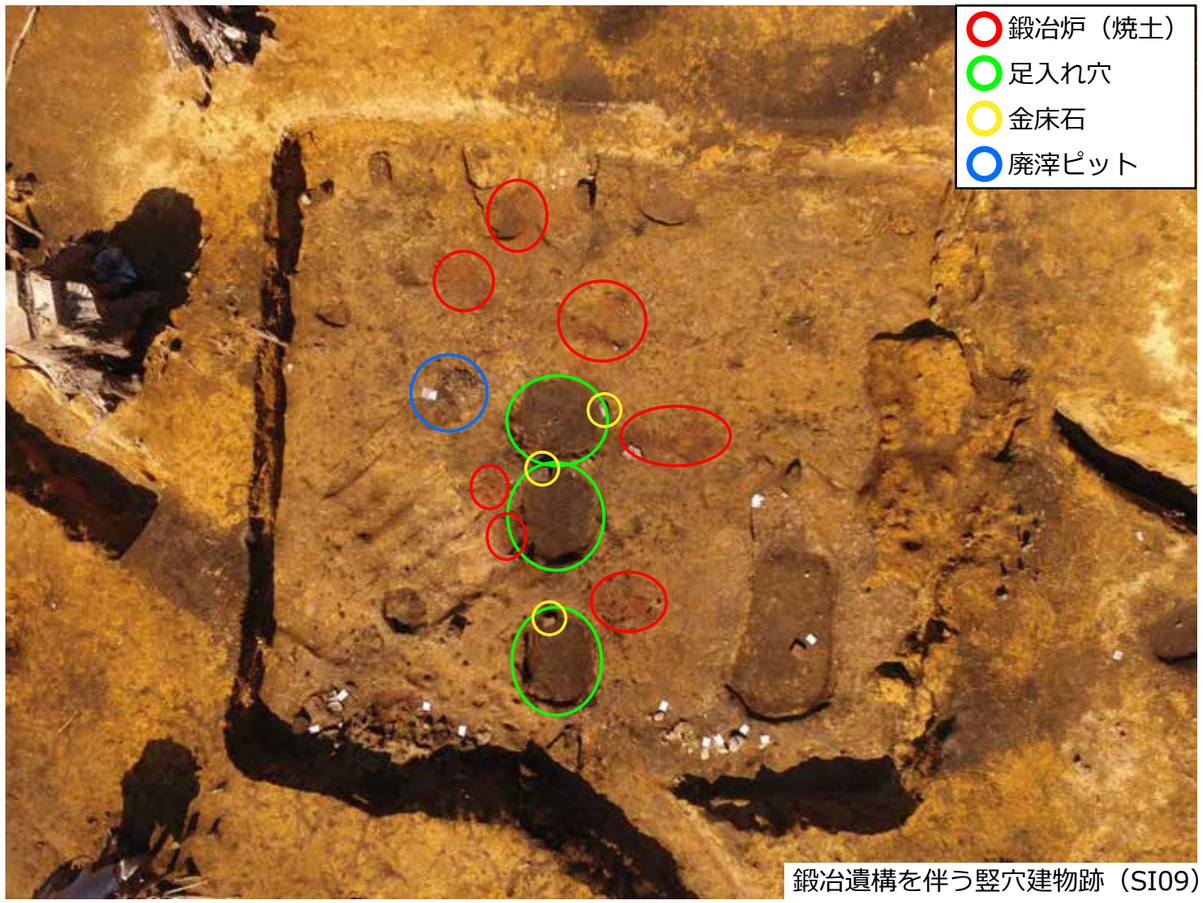
本遺跡は八戸市役所から西へ約 5.4 ㎞、北を五戸川、南を馬淵川に挟まれた標高 55 ～ 70mの段丘上に位置しています。調査の結果、縄文時代早期中葉（約 8,600 年前）から平安時代（9 ～ 12 世紀）に至るまで断続的に使用されていたことが明らかとなりました。

縄文時代は、円形や溝状の落とし穴が遺構の主体を占めており、縄文時代を通して狩猟場であったと考えられます。なお、縄文時代早期後葉（約８,000 年前）の貝殻集中地点も見つかっており、当時の食生活や縄文海進の様相を知ることができる出土例といえます。

平安時代は、竪穴建物跡９棟、掘立柱建物跡３棟が発見されており、集落が形成されていたことが分かりました。このうちの１棟からは鍛冶炉が見つかりました。鍛冶炉は建物跡の床面に複数存在し、浅い穴や、鍛冶を行った際に出た不要物を集積した穴などもセットで発見されました。炉の状況から右図のような鍛錬鍛冶を行っていたと考えられます。棒状の鉄製品なども出土しており、集落内で使用する日用品を製作していた可能性があります。この建物跡内には、10 世紀前半に降下した火山灰が堆積していることから、それ以前に建てられたものと考えられます。

『ふるさと青森 』より引用



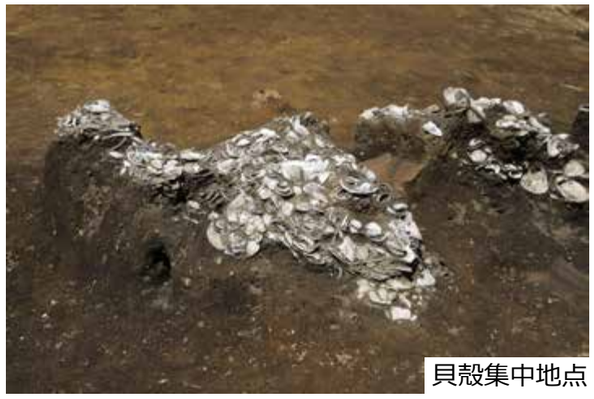


鍛冶遺構を伴う竪穴建物跡（SI09）

炭化材出土状況（SI07）

遺物出土状況（SI07 カマド）

縄文時代の落とし穴（SK10）


貝殻集中地点